



数年前、機会があつて岐阜の観
光地めぐりをした。

私は、岐阜県関市に生まれ中
学から東京に出た、少し低年齢の
上京組である。小学校の先輩の関
市後藤市長のご好意で、子供の頃
水浴びをした小瀬で、鵜匠のお宅
に一泊し鵜飼と鮎料理を堪能した。
かがり火の火の粉をあげながら次々
と鮎をとる鵜の様に「おもしろう
てやがてかなしきうぶねかな」と
はこのことと、翌年には東京の中
学の同級生夫妻六組をさそつた。
小瀬の鵜飼のあととは下呂の温泉一
泊、それから高山の朝市と山車の
見学。このふるさとの発見に続いて、
次の年には同じ顔ぶれで美濃市
と郡上八幡に小旅行をした。見
事に保存再生された旧家の町並

みを歩き清らかな水と緑にふれて、
都会育ちの一同大感激の旅となつ
た。
都会者の眼には、こうしたこの土
地ならではの自然・文化・伝統・生
活など、総じて「味わい」が地域の
力「地方力」と映つた。

大都市と地方の地域格差問題
は、先の参院選の民主党圧勝にも
つながり、与党は改めてこの課題
に本腰を入れて取り組もうとし
ている。節度なきバラマキ行政とい
つた過去の手法は通用しない。ま
た、地方の大都市化はむしろ地域
社会崩壊を助長すると感じられ
る。明治維新を期に中央集権へと
突き進んだ日本は、その体制で国
全体が、もちろん地方も、経済的
には非常に豊かになつたはずが、
格差の歪みという深刻な現実が
ある。とすれば、一極集中的手法は
もはや時代錯誤と考えるべきで、
地方自らが「地方力」を養う原
動力は、身近かな「味わい」にこそ
あると思ふがいかがか。